

サンプル版

霊カン！

憑依その2 床オナ霊

作者：金目

目次

製品版概要.....	2
登場人物.....	3
第1話 再びの恥辱！ 床オナ霊憑依 より前半.....	3
奥付	14

製品版概要

あらすじ

オナ猿であった過去を恥じ、禁欲的に、質実剛健に生きようとする剣道道場の師範代、三河虎勝。

鍛錬によって鍛え抜かれた男らしい肉体と見事な逸物を備えた虎勝が、性癖への未練を残す幽霊に憑依され、身体を勝手に使われ、性癖のために消費されてしまう。

今回の幽霊の性癖は、床オナ霊。

清廉であるべき剣道場で床オナをさせられた虎勝は、床オナの快感を忘れられず、己の淫欲でもう一度、床オナをしてしまう。。

各話タイトルとプレイ内容

第1話 再びの恥辱！ 床オナ霊憑依(憑依、床オナ)

第2話 背徳の淫欲ローション床磨き(床オナ)

サンプル版では、第1話の前半を掲載しています。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたA I・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

登場人物

三河 虎勝(みかわ とらまさ)

剣道道場師範代。26 歳。童貞。

平常時 9.8cm、勃起時 26.5cm のずる剥け。

学生時代、オナニーのし過ぎで亀頭に擦過傷を負ったことがあり、それを恥じてオナニーの回数を週に 2 回と定め、我慢している。

床オナ霊

フローリングにローションをぶちまけて床オナに耽る性癖の幽霊。

性癖への未練から虎勝に憑依し、剣道場で床オナに耽る。

第 1 話 再びの恥辱！ 床オナ霊憑依 より前半

ザアザアと、冷たいシャワーが虎勝の裸体を清めていく。

起床後の習慣である剣道場の床磨きと竹刀素振りを終えた虎勝は、汗を流し、心身を引き締めるために冷水シャワーを浴びている。

シャワーを浴びる虎勝の裸体は、26 歳という若さながら男という機能を研ぎ澄ませた凄みが溢れている。

幼い頃より剣道に専心し続けた虎勝は逞しい筋肉に覆われている。

竹刀を振るい、対戦相手を見据え、打ち倒すために鍛え抜かれた筋肉は、逞しさだけではなく、刀のような凄みも備えている。

シャワーによって濡れ、肌に貼りつく体毛も、不潔さを感じさせない程度に濃く、雄臭さを醸し出している。

濡れて貼りつくチン毛は他の体毛より厚みがあり、黒々としている。

そして、チン毛の先、股座にぶら下がる逸物は、その威容により、雄の性機能の高さを誇示している。

平常時でさえ 10 cm を超える陰茎は太々しく、張り巡らされた血管は海綿体の怒張を支えるためか、常人よりも太めだ。

亀頭はずる剥けで、高い雁首の根本に自然に剥けた包皮が留まっている。

虎勝の亀頭は、雁首のあたりが黒ずんでおり、鈴口に向かうにつれて黒ずみが薄れている。

童貞の虎勝は、女の身体を味わったことがない。

虎勝の亀頭が黒ずんでいるのは、シコシコしまくった結果の擦過による色素沈着なのだ。

虎勝は、己の逸物を見下ろし、大きく、深く、嘆きに満ちた溜息をついた。

虎勝は、オナ猿であった過去を強く恥じている。

同級生たちよりも早く精通を迎えた虎勝は、オナニーの快感にド嵌まりしていた。

オナニーに溺れていたともいえる。

暇さえあれば、虎勝は二次性徴により大きく成長し始めた逸物を握り、シコシコしまくり、気持ちよくザーメンをぶっ放していた。

剣道道場の師範代になれるほどの腕前に至るために剣道に専心している虎勝だが、オナ猿だった頃は、逸物を握る時間が多すぎた。

朝勃ちを鎮めるために1発、朝稽古の前後に1発ずつ、朝食後にも1発、と起床から通学までの時間に4回もオナニーをすることは当たり前であった。

学校でもムラムラに耐えきれず、学校のトイレでシコったこともある。

帰宅後も何度も逸物を握ってシコシコしまくり、夜中に目を覚まして布団の中で逸物を握ってザーメンをぶっ放すことさえあった。

チン毛の濃さと、デカイ金玉を見れば、虎勝の奔放な性欲が脚色などではない、と実感できるだろう。

このように、オナニーにド嵌まりしていた虎勝は、己のオナニーの回数を気にしてもしなかった。

オナニーは気持ちいいし、ザーメンをぶっ放すとすっきりする。

だから、回数を抑える必要など、虎勝は感じなかったのだ。

とある大会の予選で初戦敗退するまでは……

虎勝は、冷水を頭から浴びながら、あの日のことを、己の性欲を抑え込もうと決意した日のことを思い返す。

あの日、虎勝は亀頭の裏側がチクチクと痛むことに気がついた。

亀頭の裏側、裏筋の左右のちょっと盛り上がったあたりに血が薄くにじんんでいた。

オナニーをしまくったことで虎勝の亀頭が限界を迎え、擦過傷ができてしまったのだ。

虎勝は、この程度の痛みなら耐えられる、と思っていた。

だが、虎勝の逸物は大きく、ちょっと歩いただけでも禪の中で擦れて痛む。

ずる剥けの虎勝は、亀頭を守る包皮が後退してしまっている。

動くたびにチクチクと痛む亀頭を無視して試合に挑んだ虎勝は、集中力を欠き、初戦の対戦相手に面を決められてしまった。

そして虎勝は、オナ猿であった己を強く恥じ、オナニーの回数を週に2回に抑えることを決意した。

その決意は、ずっと守られるはずであった。

冷水のシャワーを頭から浴びながら虎勝はごつごつとした掌で肌を撫で、いや、汚れを落とすように強く擦りつけている。

「くそっ……くそっ……」

虎勝は、悪態をつきながら、掌を裸体に強く擦りつける。

虎勝の股間では、逸物がムクムクと勃起し始めている。

虎勝は思い出してしまう。

全身で浴びる冷たい夜風、スリルによって高揚する性欲、そして……普通のオナニーでは味わえない射精の快感を……

あの大会を、オナニーのし過ぎで亀頭の裏側に負った擦過傷で初戦敗退してしまったあ

の日のことを、虎勝は、決して、忘れてはならない。

ゆえに、幽霊の変態性欲に流されて全裸ランニングや野外全裸オナニーをしてしまった無様な虎勝には、徹底的な罰を与えなければならない。

二度と、奔放な性欲に負けないように……

二度と、オナニーに溺れないように……

二度と、変態幽霊に屈服しないために……

三度に渡る金玉叩きによって、虎勝の逸物は完全に萎えた。

虎勝は、金玉叩きの激痛と悪寒に耐えながら、冷水シャワーを浴び続ける。

奔放な性欲を洗い流してもらえるように、虎勝は冷水シャワーに縋り続けた。

「おおい、虎勝」

冷水シャワーを終えた虎勝は、道場の師範であり、己の父親である銚彦に声をかけられた。

同窓会に参加するために礼服を着ている銚彦がまだ家にいることに、虎勝は疑問を抱いた。

「親父、時間は平気なのか？」

「通信販売をするな、とは言わないが、荷物が届く日ぐらいは先に連絡してくれ。

家を出る前に出鼻をくじかれたぞ」

そう告げる銚彦は段ボール箱を抱えている。

伝票には虎勝の名が、送り主の名は「ミッドナイトスーパー」という覚えのない会社、そして品目にはボディソープと記されている。

虎勝は、通信販売でボディソープを買った覚えなどない。

もしや、送りつけ詐欺なのでは——

「では、出発する。

同窓会の会場のホテルは前に伝えたとおりのだ。

戸締りに気をつけてな」

虎勝が返事をするより早く、銚彦が虎勝に段ボール箱を押しつけ、足早に玄関に向かっていった。

「参ったな……」

虎勝は押しつけられた箱を見下ろし、ぼやいた。

頼んだ覚えのない通信販売、それも、一度も使ったことのない会社からとなれば、虎勝の頭に最初に浮かぶのは、送りつけ詐欺だ。

……たい……したい……

「っ！」

どこかから聞こえる声に、虎勝は顔をしかめた。

覚えがある。いや、忘れられるはずがない。

この囁きは……何かに飢えている声は……

「ふざけるな！ 俺を巻き込むな！」

誰もいない家の中、虎勝は大声で叫んだ。

負けたくない。

また、変態幽霊に流され、変態行為で絶頂したくない。

何より……

普通のオナニーよりも気持ちよいことなど、これ以上知りたくない！

知ってしまえば戻れなくなる。

変態快感に溺れてしまえば、虎勝はまた、オナ猿に戻り、そして、剣道師範代としての節度を捨て去ってしまう。

虎勝の脳裏に、初戦で敗退した屈辱の剣道大会が浮かび上がる。

対戦相手も、同じ学校の学生たちも、何より、虎勝自身、信じられなかったあの敗北を…

…

あんなにも悔しく、恥ずかしい敗北など、二度と味わいたくない。

「出ていけ！ 俺に干渉するな！」

虎勝は必死に叫ぶ。

……やっと届いた。

これで……床オナができる……

もう一度……もう一度だけ……

「床オナで無様絶頂するんだ！」

虎勝の身体が、卑しい願いを叫んだ。

虎勝の魂は、恐怖に震えあがった。

虎勝の身体が、段ボール箱を床に下す。

そして、しゃがみ込んだ虎勝の身体が、伝票を引きはがし、ガムテープを引きちぎり、段ボール箱を開ける。

……いつから、いつから憑依されていたんだ……

虎勝の魂は混乱し、身体の片隅で事態を傍観することしかできない。

開かれた段ボール箱には、緩衝材に囲まれた半透明のボトルが3本入っていた。

虎勝の身体がボトルを取り出す。

「ああ、やっぱりこのローションでないと」

虎勝の身体が悦びの声を発している。

虎勝の魂は、虎勝の身体を通じ、握られているローションを見る。

ローションのボトルには、「これはもうマ○汁そのもの！ 快感高揚絶頂ローション」と記されている。

「さあ、ローションぶちまけ床オナの時間だ！」

虎勝の身体が淫らな宣告をした。

止めろおおおおおおお！

虎勝の魂は、己の身体の片隅で叫ぶことしかできなかった。

虎勝の身体が、実家の玄関を出る。

卑猥なローションを隠しもせずに虎勝の身体で歩き回られることに、虎勝はギョッとする。

今日は父親にして道場の師範である銚彦が同窓会に出席するため、門下生への稽古は休止となっている。

ただ、三河家への客人が来ないとも限らず、卑猥なローションを抱えて移動する己の身体を目撃され、咎められたら、どうすればいいのか……

剣道道場の師範代として、一人の男として、こんな卑しい姿を誰かに目撃されたりしたら……

虎勝の魂は、恥辱に震えた。

虎勝の魂は、冷水シャワーを浴びながら思い返してしまった全裸ランニングや野外全裸オナニーのスリルを思い出してしまう。

目撃されるかもしれないというスリルが燃え上がらせる快感を、虎勝の魂は求めてしまう。

……駄目だ！ これ以上卑しい快感に負けるわけにはいかない！

虎勝の魂は、身体の片隅で叫び、卑しい快感に負けそうな己を奮い立たせる。

だが、虎勝の身体は勝手に動いている。

不埒な床オナ霊の意に従い、虎勝の身体が剣道場に向かっている。

虎勝は、床オナ霊の卑しい叫びを思い出した。

床オナ霊は、「ローションぶちまけ床オナ」と叫んでいた。

……おい！ 止めろ！ 止めろ！

虎勝の魂は、己の身体の片隅で必死に叫ぶ。

「ああ、もう一度床オナできる！

しかも、男たちが健全な汗を流す剣道場で！」

だが、虎勝の身体は床オナ霊の下劣な欲望を嬉しそうに発している。

「真剣に竹刀を振っている剣道青年たちは思いもしないだろうなあ。

毎日毎日丁寧に磨かれている床が、これから俺のおマ○コになるんだって。

ああああ、最高だあ」

虎勝の逸物が、禪の中でぐぐっと勃起し始めている。
虎勝の魂もまた、己の身体に何が起きているかを感じている。

……止めろ！ 出ていけ！ 俺の身体から出て行け！

虎勝の魂は必死に叫ぶが、床オナ霊から己の身体を取り戻すことができない。
「床にローションをぶちまけて、淫乱おチンポを擦りつけて、気持ちよく射精するぞ。
鍵も用意しておいたしなあ」
虎勝の魂は、床オナ霊が剣道場の鍵を握っていることに驚く。
一体いつから、この床オナ霊は虎勝の身体を乗っ取っていたというのか。
少なくとも、虎勝の記憶にないローションの購入の時点からだ。
「さあ、俺のおマ○コ道場の御開帳だ」
床オナ霊が勝手に持ち出した鍵を使い、虎勝の身体で剣道場に無断侵入しようとする。

……止めろ！ ふざけるな！ それだけは止めろ！

虎勝は、床オナ霊が己の身体で剣道場を冒涇するのを阻止しようと、これまで以上の剣幕で必死に叫ぶ。

けれど、虎勝の魂の叫びは、虎勝の身体を止めることができない。

虎勝の身体が剣道場の鍵を開ける。

「ふんふふふん、剣道青年たちの聖域、ごかいちょうう」

虎勝の身体が卑しく笑い、剣道場の中に入る。

無人の剣道場は、剣道に邁進する者たちが至るべき境地のように、静寂を保ち、空気も澄んでいる。

虎勝が毎朝磨き、門下生たちが稽古の前後に磨いている床には塵一つ落ちていない。

窓から差し込む陽光で照らされた床は、この道場に集う門下生たちの心根を反映しているのだ。

「ああ、惚れ惚れするような見事な床だ。

俺の家は、ワックスがけの安物の床だったからなあ。

こんな良い床で床オナしたかったんだ」

虎勝の身体が卑しい欲望を述べ、道着を脱ぎ始めた。

……止めろ！ ふざけるな！ くたばれこの変態野郎！

虎勝の魂は門下生たちの、いや、剣道に邁進する者たちの聖域である剣道場を下劣な欲望で汚そうとする床オナ霊を止めようとする。

だが、身体の片隅で声にならない叫びをあげることしかできない虎勝の魂は、無力だ。

虎勝の身体が、道着を脱ぎ捨て、袴を脱ぎ捨て、白禪一丁になる。

虎勝の白禪は、床オナ霊の興奮に影響され、前袋が大きく盛り上がり、我慢汁でねっとりと濡れている。

ねっとりと濡れた前袋は、勃起によって大きく盛り上がり、虎勝の陰茎や尿道の形にぐぐいっと盛り上がっている。

「でっけえチンポだなあ」

虎勝の身体が卑しく笑い、白禪の前袋をゆっくりと撫でていく。

止めろっ！ ……っう！

虎勝の魂は、床オナ霊の行為を止めようとするが、白禪越しに発情する逸物を撫でられただけで、虎勝の身体も魂も、疼いてしまう。

オナ猿であった過去を恥じ、禁欲的に生きようとしているだけで、虎勝の雄臭い身体には奔放で獰猛な性欲が宿っている。

虎勝の性欲の膨大さは、精通したばかりの時期に、毎日10回前後のオナニーに耽れたことにも示されている。

毎朝毎朝、膨大な性欲とザーメンを過剰生産する金玉によって、虎勝の身体と魂は射精の快感をたっぷりと教え込まれている。

ゆえに、発情してしまうと虎勝は抑えが利かなくなる。

虎勝の身体は、簡単に快感に流される。

オナ猿であった過去を恥じる虎勝の魂も、快感を拒むことができない。

「ああ、これから床オナだ！

死ぬ前に一度はやりたかった、道場での床オナ！

心技体を鍛え、サムライを目指す立派な男たちの道場を！

この俺の！ 下劣な欲望と！ 欲棒で！

床マ○コにしてやれるなんて！

死んだと思ったのに！ こんな機会が！ あるなんて！

神様はいるんだ！」

虎勝の身体が卑しい笑みを浮かべ、両腕を天に掲げる。

……ふざけるな！ 忌々しいド変態！

虎勝は身体の片隅で床オナ霊を怒鳴りつける。

だが、虎勝の叫びは床オナ霊を怯えさせることも、己の身体を震え上がらせることもできない。

「まずは、この床の味見をしないとなあ」

虎勝の身体が剣道場の床に平伏する。

虎勝の身体が口を開き、舌を伸ばす。

予想もしたことがない変態行為に、虎勝の魂は怒鳴ることすら忘れ、愕然としてしまう。

口を大きく開けた虎勝の顔がゆっくりと剣道場の床に近づく。

大きく口を開けているため、虎勝の口から涎がぬとぬとと垂れ落ちる。

虎勝の舌が、剣道場の床を舐め始める。

アイスクャンディーを舐めるように、虎勝の身体がゆっくりと、丁寧に床を舐めている。

虎勝の舌を通じて、剣道場の床の味が虎勝の魂にも届く。

……止めろ！ 気持ち悪い！ さっさと止めろ！

虎勝の魂は、脛の臭いと味をおぞましく思う。

だが、虎勝の身体は止まらない。

愛おしそうに、命を潤す恵みのように、虎勝の身体は丁寧に、剣道場の脛張りの床を舐めている。

ギンギンに勃起し、限界まで膨らんでいる白禪のもっこりが剣道場の床に擦れる。

キュッキュと我慢汁に濡れた白禪のもっこりが剣道場の床に擦りつけられる。

「ああ……デカチンたまらねえ……

こんなデカチンで床マ○コを味わえるなんて最高だあ」

虎勝の身体が、変態性欲を吐き、恍惚とした笑みを浮かべている。

虎勝の身体は、床オナ霊の欲望に流され、キュウウウキュウウウと、ゆっくりと白禪のもっこりを剣道場の床に擦りつけ始めた。

……あああ……こんなのは駄目だあ……

おかしくなっちゃう……腰を動かさないでくれよお……

淫らな顔をして白禪のもっこりを床に擦りつけている虎勝の身体の中で、虎勝の魂は、切ない快感に喘いだ。

白禪の前袋の中で、虎勝の逸物は上向きに勃起している。

白禪自体はきつく締められているため、フル勃起逸物が前袋の外に出ることはない。

故に、前袋の中で虎勝の逸物は、前袋を突き上げるように大きく曲がり、陰茎の太さや浮かび上がる尿道の太さを前袋に透かしている。

大きく膨らんだ前袋を床に擦りつければ、大きく曲がった陰茎の中ほどが床と接する。

虎勝の陰茎は太く、長いので、陰茎をちょっと擦りつけただけで、梃子の原理により、亀頭が前袋の中で大きく揺れる。

我慢汁で濡れたずる剥けの亀頭が、毎日 10 発前後のオナニーを可能にする淫乱な亀頭が、前袋の中で擦れながら揺れる。

直接握りこんでシコシコする愛撫しか知らない虎勝にとって、濡れた布地で擦れる快感は、新鮮な快感である。

「ああ……夢みたいなデカチンだ……

真ん中を擦りつけるだけで、亀頭までジンジンしやがる……

もうちょっと、この快感も味わっておかないとなあ……」

虎勝の身体が、虎勝の獐猛な淫欲のようにいやらしく笑い、白禪の前袋を剣道場の床にゆっくりと擦りつける。

キュウウウウウウウウウ……キュウウウウウウウウウウウウウウ……と、さらにゆっくりと前袋を床に擦りつけながら、虎勝の顔が火照っていく。

……やめてくれえええ！　こんな生殺しはいやだあああああ！
せめて激しく！　もっと早く動かしてくれえええええ！

虎勝の魂は、焦らしの快感に耐えきれず、いやらしく悶えている。
虎勝の魂の手足と逸物が生えていたのならば、即座に逸物を握り、いきり立った魂の逸物で絶頂を欲しただろう。

「ふううう……もうちょっと擦ってもいいかな……
夢みたいな快感だ……」

虎勝の身体は、焦らしの快感を堪能し、淫らに笑っている。

……いやだああ！　焦らさないでくれよ！
こんな生殺しじゃなくて！　もっと激しく床に擦りつけてくれよおおおお！

虎勝の魂は、白禪の前袋を擦りつけるだけの前戯に耐えきれず、床オナ本番を望み、喘いでいる。

「さあ、そろそろ本番に入るぞお」

虎勝の身体が立ち上がった。

虎勝の白禪は、我慢汁でぐちょぐちょになっている。

白禪で吸いとりきれなかった我慢汁が、虎勝の内股までもねっとりと濡らし、内ももの毛を肌に貼りつかせている。

「さあ、My Love ローション。

この床を俺のおマ○コにしてくれよお」

虎勝の身体が下品な笑みを浮かべ、ローションの蓋を開けた。

そして、ローションを床に向かって思いっきり絞り出した。

ローションが、剣道場の床に広がっていく。

剣道に邁進する者たちの足を受け止め、汗を受け止め、彼らの感謝の床磨きによって保たれていた剣道場の床の純潔がローションによって冒涇されていく。

「さあ、御開帳だ」

虎勝の身体がいやらしく笑い、白禪を解いた。

解かれた白禪がべちゃっと床に落ちた。

虎勝の獰猛な性欲が過剰分泌している我慢汁を限界まで受け止めていたため、布らしからぬ重い落下音が剣道場に響く。

虎勝の逸物が天を貫くように雄々しく勃起している。

童貞であるにもかかわらず、溢れ出る我慢汁に濡れた逸物は、黒ずんだ亀頭と我慢汁に濡れた卑猥な姿により、百戦錬磨のヤリチンのような風格を漂わせている。

虎勝の身体は床オナ霊の興奮と完全に同調しており、鈴口から我慢汁がぬとぬとと溢れ続けている。

……早く！　早く！　さっさと俺の身体でイってくれよおおおお！

尿道から溢れ出る我慢汁が理性を流し去ってしまったのか、虎勝の魂は絶頂を渴望している。

オナ猿だった過去を恥じ、禁欲的に生きようとしているだけで、虎勝は性欲にも快感にも弱い。

発情しないように己を戒めている間は、質実剛健を体現できる虎勝だが、一度発情してしまえば、淫乱に、食欲に、快感を求めるいやらしいオナ猿のままだ。

「さあ、ファイナル床オナ！

このデカチンでこの剣道場の処女をぶち抜いてやるぜえ！」

虎勝の身体が、虎勝の魂では決して口にも出さず、思いもしない下劣な欲望を叫ぶ。

……早く！　早く！　早く俺の身体でイっちまってくれええええええ！

虎勝の魂は、性欲の疼きからの解放を求めて淫乱に叫んでいる。

身体を無断借用されている虎勝の魂が絶頂に至るには、床オナ霊の行為を肯定し、速やかな遂行を求めるしかないのだ。

奥付

サンプル版 『霊カン！ 憑依その2 床オナ霊』

初出：2026 年 09 月 27 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep

同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。